

今号も充実した内容をお届けできる。特集1のアメリカにおける歴史認識問題にご寄稿いただいたケビン・ドーク論文とジェイソン・モーガン論文を読むと、米国の学界が日本に対する歴史認識だけでなく、根本からおかしくなっていることがよく解る。そして、その背後に左派グループによる組織的な革命活動があることも理解でき、空恐ろしい思いに囚われた。

日本に「反日日本人」がいるように米国には「反米米国人」がいるのだ。韓国の文在寅政権を支えているのも「反韓韓国人」だから、自由民主主義の先進国はどこでも“獅子身中の虫”を抱えるのだろうか。

私たちは日本における歴史認識問題として、東京裁判史観と「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム(WGIP)」の克服を課題としてきた。しかし、米国の学界の現状を見ると、もう一つの敵の存在が浮び上がってくる。価値相対主義と「弱者」絶対主義のグロテスクな結合物が、人々と社会を全体主義に追い込んでいく姿だ。

だからこそ、「ウソつきは泥棒のはじまり」「お天道様が見ている」という伝統的なわが国の道徳は正しいと、どこでも誰に対しても叫び続けなければならないのだ。

特集2では、前号に続いて私が徴用工の手記分析を行い、勝岡先生が緻密な調査に基づく力作論文を寄稿すると共に、膨大な文献目録2を作って下さった。また、本研究会事務局の長谷亮介氏が映像情報を整理して、本邦初公開の韓国政府作成「戦犯企業リスト」を資料として掲載できた。徴用工問題が日韓関係の根幹を揺がす大問題になりつつある中、本研究会では引き続きこの問題に関する研究と広報に力を注ぎたい。

柴公也先生はこれまで、日本統治時代を生きた多数の朝鮮人、台湾人、日本人の聞き取りをしておられる。その中から今回は、朝鮮人警察官の回想をご寄稿いただいた。

高橋史朗先生の慰安婦虐殺映像に関する報告は時宜にかなったものだが、映像そのものは米国にあるので、8月末から9月にかけて先生は訪米調査に臨まれている。次号では、その成果を続編としてご寄稿いただく予定だ。また、今号から書評コーナーを新設したところ、川久保剛先生から本研究会の問題意識と重なる良い書評を頂けたことに感謝している。(西岡)

7月に歴認研のスタッフ数名で訪韓し、韓国の主要な博物館で徴用工問題や慰安婦問題をどう展示しているかを調査してきた。有名なナムムの家にも行ったが、その脇にも立派な歴史館が出来ていた。

釜山の国立日帝強制動員歴史館にも行ったが、どこでも感じたことは、反日展示の材料は全て日本人が提供しているということだ。釜山の歴史館では、安倍晋三・橋下徹・西村真悟といった日本人の「妄言」を糾弾する映像が流れている傍らで、「日本の良心の声」として山田昭次・林えいだい・内海愛子といった面々が顕彰されていた。

彼らはそうやって国内ばかりか、隣国の歴史認識をも反日一色に染めてきた。こういう処に、この問題の根深さがあるのだ。

(勝岡)

歴史認識問題研究

(年2回発行)

第3号 (平成30年秋冬号)

発行日：2018年9月20日

発行人：西岡 力

編集人：勝岡 寛次

編集部：歴史認識問題研究会

頒 価：1,000円

発行所：〒277-0065 柏市光ヶ丘2丁目1番1号
公益財団法人モラロジー研究所
歴史研究室

T e l : 04-7173-3197

F a x : 04-7173-3199

印刷所：株式会社 長正社